武蔵野日曜集会　祈祷会

相愛すべきこと

――ヨハネ第一書第3章13～24節――

１９７５年９月７日
小池辰雄

死から生命に移る　地獄・煉獄・天国　「３の16」「プシヘー」から「ゾーエー」へ　「ゾーエー」と「プニューマ」　福音を身証する　互に相愛すべきこと　祈り

【ヨハネ一３】

13兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。14われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。15おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。17世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉ずる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。18若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とを以てすべし。19之に由りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。20神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。21愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向かいて懼なし。22且すべて求むる所を神より受くべし。是その誡命を守りて御心にかなう所を行えばなり。23その誡命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互いに相愛すべきことなり。24神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。

●死から生命へ

13兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。

キリストを受けとらない世界を「世」という。ですから、

「キリストを受けとらない人たちがあなた方を憎むとも、これはちっとも怪しむにたりない」

と。即ち、「世」は自己中心の世界です。それから、「汝ら」という信ずる人たちはキリスト中心の世界ですから、合わないんですね。人間としては、あるところまでは、もちろんお

互さま人間ですから、合いますが。けれども、あるところが限界になってしまって、それから先は話が合わないんですよ。「それから先」ということは、要するに初めから合わない方向をもっているから、あるところまではまぁまぁだけれども、それから先はいよいよ方向が違うことが分かってきますから、それで話が合わないというわけです。

14 **われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、**

この「移った」という字は完了形が使ってあるはずです。この場合の「愛する」という字はやはり「アガパオー」という字が使ってある。「嫌う」という字は「ミセオー」という字ですが。「アガパオー」は天的な意味の「愛する」です。この「兄弟を愛する」というのは、キリストの愛で愛するという、そういう「愛」という特別な言葉です。

「死から生命（ゾーエー）に移ったということはみんな知っている」

と。「兄弟を愛するによって生命に移っている」ので、この「兄弟を愛する」ということがなければ、本当にこの「生命に移る」ということはない。ただ「信ずる」だけではダメなんです。

「兄弟を愛するということによって生命に移った」

ということは非常に注目するべきことです。だから、

「生命しているということは、生きているということは、愛するということだ」

と。この「愛する」というのはもちろん、「人助けをする、人を担う」意味においての愛するということです。ただ感情的に愛するという意味ではない。

愛せぬ者は死のうちに居る。15 **おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、**

これはキリストが言われたとおりです。だから、この世の中は、妬み・憎しみ・争いというものがある。そういうものは殺人につながる。

凡（おおよ）そ人を殺す者の、その内に永遠（とこしえ）の生命（いのち）なきを汝らは知る。

まぁ、殺人犯は――精神的に言っても殺人方向の人は――みんなこれは地獄行きだと。

●地獄・煉獄・天国

そういった絶対的な宗教的な意味においては、たとえ死刑がなくても、ああいう人たちはみんな地獄へ行くのだから、もうしょうがないです、これは。そういう意味において、天国、地獄の存在というものは非常に尊厳なものです。

こないだ、私はダンテのことを書きましたけれども、著作集の第二巻はダンテとゲーテのことになる。ダンテの『神曲』は、何といっても私は世界の詩のうちで一番好きです。この地獄・煉獄・天国ですね。まぁ大変なもんです。彼は流浪の旅19年のうちであの神曲を書いたんですから。本当に血と涙で書いた。ダンテの『神曲』は読みましたか。ぜひ読んでくださいよ。とにかく凄いやつですね、ダンテというのは。９歳のときに、ベアトリーチェを一目見ただけで全身の血が震えたという。18歳のときにもう一遍ベアトリーチェに

遇った。けれども、彼女は人妻になってしまった。彼はその時ぶったおれた。それから、『新生』という詩集をその前後に書きました。ベアトリーチェは23歳か24歳で死んでしまった。

「私はある一人の女性について未だかつて書かれたことのないものを書く」

と『新生』の終わりに書いている。それであれが『神曲』に展開していった。ダンテがもし首尾よく、ベアトリーチェと結婚してしまったならば、あの『神曲』はできない。とにかく、偉大なものは大体、悲劇をとおしてできる。余計なことを言いましたけれども、こないだ私はダンテのことを書いたものだから。

●「3の16」

16**主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、**

私は数ですぐ思うんですよ。3章16節というのは、ヨハネ伝3章16節がやはりこれと似たことが書いてある。有名な、

「16**それ神はその独子（ひとりご）を賜（たも）うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。**」（ヨハネ3・16）

という句です。これとこのヨハネ書簡の3章16節です。

この「3の16」というのは実は、3月16日というのは私の父の命日でね、そういう数の上からも忘れられないんですけれども。また、父の命日に次女が生まれてしまって、次女の誕生日です。余計なことばかり言って申し訳ない。

まぁ、私の録音なんてものは、そこらでそう勝手に聞かせたら困るですよ。あなた方は親しいから、私は勝手なことを言っているんだから。

●「プシヘー」（肉体の生命）から「ゾーエー」（永遠の生命）へ

要するに、愛することは自分も生き、人も生かす。憎むことは自分も死に、人も殺す。こういうわけです。しかしながら、この「愛する」は、自分が生きるといったって、本当に生きるためには死を超えるわけです。即ち、自分の生命を人のために捨てるわけですから、それがその3章16節の、

「16**主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり**」

ということ。これは非常にはっきりしている。この場合の「生命」というのは「プシヘー」（肉体の生命）という字が書いてある。英語でいうと、「ソウル」と同じ字です。「ライフ」とか「ソウル」とか。ドイツ語でいうと「ゼーレ」（魂）になる。

「永遠の生命」のときは、「プシヘー」とはいわないで、「ゾーエー」（永遠の生命）という。主は我らのためにこの「プシヘー」を即ち、あの肉体をお捨てになった。けれども、それによって主は「永遠の生命」に入られた。即ち、主は「プシヘー」を捨てたけれども、この「プシヘー」はもちろん「プシヘー」の奥に「ゾーエー」があって、それで、それが復活したんですから。

復活したキリストは「ゾーエー」の生命を持ったキリストで、「プシヘー」の生命を持ったキリストではない。そういう意味において、この「生命」という言葉は、また「愛」という言葉も使い分けしてありますから。

「これによりて、アガペーを知った」

という。

「愛する」というのは、実力がなければ愛せないんですよね。その実力は何かというと、この「ゾーエー」を持っていなければ愛せない。即ち、キリストの「永遠の生命」です。それは同時に――その「永遠の生命」の質は何かというと――「アガペー」（神の愛）なんです。ゾーエーの質はアガペーなので、即ち、「本当の生命」の質は愛なんです。だから、その本当の生命を持っていると、愛せる。しかし、本当の生命を持っているその表面の方には、現象面には、このプシヘーだの我々の肉体的な生命がある。それをキリストは捨てられたと、こういうわけです。

そう言ってしまうと、簡単なようだけれども、この肉体的なプシヘーという生命は要するに我々が持っているこの肉の生命ですから、それを簡単に捨てられるものではない。しかしながら、我々がいわゆる生死を超越できるというのであるならば、それは絶対的な生を持っていなければ、生死を超越することはできないわけです。そこで、絶対的な生なるこのキリストの生命をいただかないではいられないわけです。

●「ゾーエー」（永遠の生命）と「プニューマ」（聖霊）

どうして、我々は「絶対的な生」をいただいたか。言うまでもなく、キリストが私たちに「聖霊」をくださったことによって、この絶対的生が来ているんです。この「ゾーエー」はまた「プニューマ」「聖霊」、御霊と離すことができない。だから、「聖霊のバプテスマ」を受けた者は、本当のゾーエーを持っている。それが本当に人のために自分のプシヘーを捨てる、それだけの気合を持っている。これは本当に祈っていかないとダメです。本当に祈っていく。そして、祈りの世界で本当にそこを受けとっていく。その点はもうパウロが使徒行伝で実証しているわけです。

「福音のためにはもはや生命も重んじない」

という。あの場合の「生命」という字はそういう意味です。使徒行伝の20章24節に、

「24 **然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果さん為には固より生命をも重んぜざるなり。」（使徒行伝20・24）**

と。やはり「プシヘー」という字が使ってある。「プシヘー」を一向に問題にしないという。

「主は我らのために生命を捨てたまえり」

は、なさったのはキリストだから、我々は楽に読めるといえば読めるけれども、今度はパ

ウロが言った、

「**主と共に己の生命も重んぜざるなり**」

なんていう言葉をそう簡単には読めない。

●福音を身証する

私は『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻１９７５年刊）を書いたでしょ。あれは正直、私の信仰50年のひとつの結晶です。ですから、あれを私は読みながら――本当に私自身を打ち込んであるから、これが本当に世に投ぜられたら、もうその文字の中に私は生きているんだから――

「私はいつ倒れてもいい」

と正直そういう気持になった。もちろん、私はまだこの先も仕事はしたいけれども、仕事は分量ではなくて質の問題ですから。そういうことで、皆さんも、自分の燃やすものを本当に燃やさないとね。

私は、今度の中学・高等学校の卒業アルバムに何か書いてくれというから、ちょっと祈って書いた。

「天賦の才能を鍛えぬけ」

と書いてやった。天から授かった才能を鍛えぬけよと。もうとにかく、これだと思うことに打ち込めということです。男性でも女性でも、人間は打ち込みがなかったらしょうがない。何でもいいから、それが奉仕の仕事であろうと何であろうと、とにかくそこに打ち込むということ。それによって神の栄光を現すことです。

そして、その打ち込みが、神の栄光を本当に現す、福音を身証するという角度でなければ、打ち込みの本当の力は出てこないです、いわゆる自己本位だったら。福音が中心であると、打ち込むことが同時に、あるときには本当に人を救ってあげるという行動に自在に変化して出てくる。それも、そういった行為も決して「この行為、かの行為」ではなくて、一つの中心があると、それがちょうど白光が、あるときは紫色に光ったり赤に光ったりするように、いろんな行為に自由に展開して出てくる。そういうもんです。そういうことは、御霊の世界に来ないと分からないですよね、普通の人に言っても。

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。

「べきなり」なんて言われたって、これはダメなんです。

「我等もまた兄弟のために生命を捨てないではいられないような気持にだんだんなろうじゃないか」

と。パウロは、

「同胞（はらから）のためには、キリストに呪われてもいいんだ」

というようなことを言ったでしょ。あれは極限的な表現ですけれども。それくらいにパウ

ロという人は、「信仰の使徒」と言われながら、もの凄い「愛の使徒」であったわけです。私は皆さんにまだ見せてないんだけれども、本の奥付のところに、第三巻『愛の神学』（後に『無の神学』に改題、１９８２年刊）の下に「劇的有機体的神学」と書いた。まぁ、こんなことを言ったやつは世界中にいないけれども。今までの組織神学に対して、私はいわゆる論理でない書き方で書こうと思っているわけです。それがどれだけ表現しうるかは知りませんけれども。聖書の生きた真理なんてものは論理的な表現で言えるものではない。

●互に相愛すべきこと

17世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉ずる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。18若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とを以てすべし。

これは今日の午前のお話と同じです。問題は、本当の言は行為なんです。行為が一番本当の言です。それが真実、まことです。「行為と真実」なんて、ヨハネはこういう二段構えの表現の仕方をしていたって、内容は一つですよ。これは「為すべし」ではない。

「為さざるべからず、為さざるをえない」

という、ギリシア語の「デイ」という言葉が多分使ってあります。

19之に出りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。

「われらの心われらを責むるとも」というのは、「旧き我」と「新しき我」とをここで使っているわけです。そんな過去のことはいいんだと。

20神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。

「神は我らの心よりも大にして」というのは愉快な言葉です。いつも我々の判断を乗り越えている。あなた方は、いろんな毎日の生活でしゃくにさわることもあるでしょう。そうしたらば、もうひとつ大きく出なければダメですよ。もうひとつ大きく出ると、

「ああ、どうも気の毒だな」

と相手を気の毒に思うようになる。そして逆に包んでしまう。

21愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向かいて懼なし。22且すべて求むる所を神より受くべし。是その誡命を守りて御心にかなう所を行えばなり。

これはまぁ非常に実践面を言っているわけだ。

23その誡命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互に相愛すべきことなり。

この「相愛する」ということは散々言っている。

24神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。

この「神、神」という代わりに、「キリスト」と言って一向に差し支えない。神とキリストとは、パウロにおいてもヨハネにおいてもいつも、どう表現しようが、その裏にはキリストが、裏には神がある。

我らその賜うところの聖霊に由りて、其の我らに居給うことを知るなり。

ここでもちゃんと、「神」「キリスト」「聖霊」が出ているでしょ、たった二節の中に。こういうふうに自然に出てくるんです、御霊の世界だと。聖書はどこを読んでも、同円異中心です。円は一つで、どこでも中心になる。おしまい。では、簡単に祈ります。

●祈り

主さま。この秋の最初の９月７日の日曜日、朝からあなたが水を割らざるところの愛をもって私たちに迫ってくださって、感謝いたします。本当に兄弟姉妹たちとあなたを中心にして動くところに何も問題はありません。常にいよいよお互いに切磋琢磨、愛し合い、励まし合って進んでまいります。愛し合うとは実にキリストにあって私たちは本当に愛し合うことによって、それが必ずその愛はまた、キリストを知らざる人たちに流れていくところのものであることをいよいよ知らざるをえません。

今日来れなかった兄弟姉妹たちは、いろいろな理由がありましたが、どうぞ、それらのところにおいて一瞬たりといえども、

「主さま！」

と言って、本当にあなたの御懐に入って、

「ああ、今日は本当に主にあって守ったところの聖日であった」

ということを一人びとりが自覚して進むことができますように願い奉ります。兄弟姉妹たちの上にいろいろな課題があったり、また問題があったりいたしておりますが、そんなことは、神さま、本当にあなたを受けとるところには既に未解決の解決であることをいよいよ信じこんで進ましめたまわんことを切に願い奉ります。かくして、キリストの生命が我らのうちに、一人びとりのうちにあり、

「わが生きるはキリストなり」

との一事がいよいよ本ものとなって進ましめたまわんことを切に願い奉ります。ただ御名を讃え奉ります。

兄弟姉妹たちもまた一週間、大いに、神さま、あなたが本当の意味において前進また前進せしめたまわんことを。また、きたるべきこの『無者キリスト』の出版がだんだん迫ってまいりましたが、主にある兄弟姉妹たちが本当に主にある友情をもってこの僕のために尽くしてくださっていることを心から感謝いたします。いま、心から感謝と讃美、御名により捧げ奉る。アーメン。